

夕張石炭の歴史村

地下坑道での体験学習

亀谷 隆



「縄文土器」
約1万年前から紀元前200年頃までの時代に
造られた表面に縄目のある土器。
版画・谷口二郎（札幌）

★石炭博物館の誕生

いま、手元に『石炭の歴史村建設基本計画書（昭和54年）夕張市』なる資料があり、計画の目的として「夕張市では、いまも槌音も高く「石炭の歴史村」の建設が進められています。これは荒廃した炭鉱閉山跡地の整備再利用をはかると共に、失われようとしている炭鉱の史蹟や石炭の史料などを、市が永久に保存し広く公開して行おうとするものですが、これを観光施設として利用することにより、市の経済再開発にも充てようとする目的で昭和52年に計画したものです」と記されている。

そもそも、石炭の歴史村として構想する原点は、昭和46年（1971）に、市が旧夕張鉄道の駅舎を転用して開設した夕張市炭鉱資料室から始まり、昭和50年（1976）に夕張市炭鉱資料館と改称した。

改称した理由のひとつとして、昭和48年（1973）に市は5カ年計画で、炭鉱博物館を建設すること

を検討し、翌々年の50年に「炭鉱モデル都市構想」をまとめたことが上げられる。

モデル構想は、住宅、教育、文化などの生活環境を整備するとし、住みよい街づくりを目的にし、炭鉱博物館は旧夕張劇場を改修して整備する計画であった。

当時の館長は、施設の改修や整備の経験がないとのことで、筆者に相談が持ち込まれた。

相談では、建物の所有者、建物の構造、改修の規模など具体的な計画について聞き、後日、現地を調査することにした。

相談での建物の構造は、鉄筋コンクリート造りとされていたが、どうも木骨構造であることが判明したことにより、転用予定とした劇場の中間に支柱を立てての総2階構造は無理となり、鉄筋コンクリート造2階建の石炭博物館を建設することにした。

建築設計では、炭鉱で使われた重量のある機械類が展示されることから、あらかじめ床を強化するなどの配慮がなされた。

さらに、かつて炭鉱従事者が掘削などの訓練をした史蹟指定の練習坑道を活用するため、博物館と連結させる立坑と水平坑道とを付帯させることにし、立坑にはエレベータ、水平坑道は隧道部と輪車路部に区分し、明治期から昭和期までの採炭技術と坑内の変遷を示すことにした。

なかでも、博物館の2階から立坑を経て水平坑道までは20メートル程度の高低差しかなく、実際の立坑から水平坑道までの1,000メートルを降りた臨場感をエレベータ内でどう体験させられるかが課題になった。

結果、エレベータの壁の一部をガラス張りにし、エレベータを保護する周囲のコンクリート壁に筋状の光を回転させて照射すれば、エレベータがより高速で降下するように見える、という人の眼の錯覚を応用することにした。

★人に物を見せる術

人の目の研究は紀元前1,000年頃からで、紀元2世紀頃、ギリシャの医学者であったガレノス（129-199）らは、動物の目の解剖から、角膜や強膜、水晶体や網膜などの知識を得ていたという。しかし、水晶体は眼球の真ん中にあるとされ、偉大な

画家として知られているレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）の人体解剖のスケッチでも真ん中に描かれている。

その後、ドイツ・パーゼルの解剖学者ポルタが、像を結ぶのは水晶体ではなく網膜であるとした。人の目は驚くほど精巧で、暗闇で何かを探そうとする場合は、通常では直径2～3ミリの瞳孔が、5～6ミリぐらいに広がり、瞳孔での調整は約5～6倍程度で、約10億倍以上という幅広い光の量の変化に対応している。それは、網膜にある視細胞が働くとき、視細胞には色を受光する700万個の錐状体と、明るさを受光する1億3000万個の桿状体とが、光の量を一定の許容量におさめてしまう仕組みがあるからといわれるが、本当のことは未だ解明されていない。

石炭博物館の展示計画を検討する際に苦労したのは、博物館内での明るい空間から、立坑、水平坑道への薄暗い空間、そして実際に使われていた坑道の暗い空間へと導く工夫であった。

それは、明るい空間から暗い空間への暗順応と、暗い空間から明るい空間への明順応の時間と距離で、照明や展示物、サインなどを総合しての検討で、飛行機が着陸寸前に室内の照明を暗くすると同じ手法の採用であった。

★臨場感ある坑内での作業

実際に坑内作業の訓練をした坑道には、坑内で使用された多様な機械が残されていた。

ところが、坑道内部は地上より湿度が高く、機械類や説明サインが錆やすくなるため、防錆処理をした上で塗装したり、送風や排気などの設備を据付けた。

また、実際に作業していた状況を示すため、原寸大の人形の製作をすることにし、多様な作業の動作の写真撮影とスケッチが行われた。一般的に写真だけがあれば済むのでは、と思いがちであるが、スケッチは作業の動作での留意や道具の名称などの情報を得る必要からである。

開館して間もなくであるが、博物館から電話連絡があり、何か事故でもあったのかな？と不安な気持ちで話を聞くと、「水平坑道に展示している初期の石炭運搬コーナの展示ですが、坑道からトロッコを馬が曳いている状況の再現展示で、ト

ロッコ1台ずつを確認するため、椅子に座って旗を持っている女性の人形が？」と不安げな口調なので、「人形の服装などや動作に間違いでもありましたか？」と聞き返すと「いや、違うんです。裾の短い着物を着て、椅子に座っている女性の股の高さが、お客さんの目の高さと同じ位なので、お客さんがめくってしまうんで、モンペのような着物に替えてもいいですか？」とのこと、「参りましたな？」と返答しつつ、「服装は調査内容を忠実に再現したので変えることはできないでしょう。で、対策として、小さな丸い手鏡の柄を人形の股間に挟むようにして立てて置いたらどうですか？、そうすれば、のぞいている自分の顔が写り、ビックリしますよ」と返答した。

★その後の石炭の歴史村

平成18年（2006）6月、夕張市は財政再建団体入りを正式表明し、1か月後、市長は炭鉱遺産を残したいとし、「第三セクターで運営できなくなれば、民間への移譲も考えるが、無理だろうから、国、道への移譲も考えたい」と語った。一方、産業遺跡を守るべく組織されていた「北海道産業考古学会」などが石炭博物館の存続に向けての署名やフォーラムを行ない、結果として平成19年（2007）、観光会社が観光施設の運営を一括受託することになり、元石炭博物館館長らで組織した「炭鉱の記憶推進事業団」が協力することになった。



profile

亀谷 隆 かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師（博物館学）、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

谷口 二郎 たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている。